元旦に筆を試す

山鹿素行

紅霞海を出でて九垓に満つ　東帝の恩波唯大なる哉

世路険夷梅識るや否や　霜辛雪苦一枝開く

【作者】山鹿素行（一六二二～一六八五年）・江戸時代前期の儒者、会津の生まれ。朱子学や軍学を修め、仏教・神道・和歌などにもくわしかった。古学を唱えたことから幕府に憎まれ、赤穂藩に預けられた。藩士たちに講義し影響を与えた。大石良雄も門弟の一人。

【語釈】＊筆を試す…元旦に詩を作ること。　＊紅霞…真っ赤な太陽。　＊九垓…世界。　＊東帝…太陽。　＊恩波…恩恵
＊世路…世の中。　＊霜辛…きびしい霜。

【通釈】太陽は海を出て、日の光は世界に満ちている。太陽の恩恵はまことに大である。世渡りのむずかしさ楽しさを梅の木は知っているだろうか。ともかく霜に耐え雪に苦しみ太陽の恩恵で一枝花を咲かせたのだ。